

同時に大本營は船舶の消耗を考慮して北方作戰準備の見地から關門
隱道の促進北九州鐵道の整備を鐵道省に要望する所があつた一方鐵
道省としても当時の生産補充船舶逐次の消耗から鐵道への輸送專家
一之を輸送專家又は陸運專家と呼んだ一に即応して鐵道輸送力の充
充を企圖し逐次之が整備を進めて行つた。併しながら軍としては前
線第一主義を採り、南方に引かれ、北方作戰準備に専念して鐵道省
の此等の企圖に対しては「若干の支援を與へた」と云ふ程度に過ぎ
なかつた。

第二節 昭和十七年秋期より米軍のレイテ上陸

前項迄に於ける鐵道作戰指導

一、本期に於ける鐵道作戰一般の經過

南方作戰の一段落と共に國軍は全般に亘り其の態勢を整へ劃期的に
兵備を強化して次期作戰に應ぜんとし一方に於て対重慶進攻作戰を

企圖しつゝ北方滿洲に對しては「昭和十八年春以降對蘇戰の生起することをあるべき」を考慮して、其の戰備を強化した。
こつした情勢にあつて、海軍作戰に於て取得した鐵道資材も爪哇に於て撤去した一部鐵道資材も挙げて北方へ集積を断行する等大本營の鐵道作戰指導方針は名實共に傳統的な對北方重点主義に歸り益々之を推進して行つた。

併しながら南方、南東太平洋方面にあつては勢に乗じてフィジー、サモアの諸島を攻略し米軍の連絡を遮断せんと策する迄に至つた我軍の作戰も昭和十七年夏に於けるミッドウエー海戰やガダルカナル作戰の失敗を轉機として攻守所を異にするやうになり次第昭和十八年九月には東部ニューギニアよりソロモン島を経てモロシナル群島を結ぶ東方第一線の守りを失はんとし、終に國軍作戰指導の方針を交更バンダ海、カロリン群島の線に防備を盡へ専ら米英に對するの止む無きに至り北方に對しては一成し得る限り戰備を強化し米露の

提携を断ち対露戦の生起を防止すしへき方針の下に逐次滿洲の精銳
を挙げて中部太平洋洋に投入するやうになつた。

四〇

この様な國軍作戰指導方針の根本的變換に伴つて大本營鐵道作戰指
導の方針も亦變換の余儀無き状況となり昭和十八年十月永年に亘り
堅持された對露作戰準備第一主義の方針を一擲し前記國軍作戰指導
の方針に即応するやうになつた。次で昭和十八年十一月に行はれた
大本營の機構改革によつて當時の鐵道課（第九課）は廢止され船舶
課たる第十課に統合され鐵道船舶の綜合輸送力の發揮を期して益々
新方針に應ずる鐵道作戰指導を推進するやうな態勢を整へた。
併しなから昭和十九年六月にはサイパン島に對する米軍の上陸を見
同年九月には中部太平洋全設の守を失ひ比島―本土の線に於て米軍
と決戦を敢行せねばならない状況となつた。

此の間南方に於ては一時華やかな軍政時代建設時代を經過し此の間
鐵道の復旧輸送力の回復等も見ると見るべきものがあつた。然れども爾後

0824

東方よりする米軍の攻勢に呼応した英印軍の西方よりの攻勢に会して昭和十九年三月よりインパール作戦を取行したが遂に失敗に歸し南方軍政重点の思想より本格的防衛作戰思想へと轉移した。

一方支那に於ては情勢の進展と共に米英の反攻に呼応する兵匪の活動在支米空軍の活動日を追ふて激しく遂に在支米空軍の対日空襲基地奪取を目的として昭和十九年春より平漢作戰湘桂作戰を取行し同年末一応其の目的を達成した。

以上の様な國軍作戰指導の方針変換に即応する鐵道作戰指導の方針変更と共に本期に於て其の指導に根本的变化をもたらしたものは前述の様な戰局の進展に伴ひ益々大となつた予期せざる船舶の消耗と敵の空襲の激化とであつた。

即ち前者は海上輸送力の減少と海上不安を反映して陸送部隊の要求となり後者は後方鐵道をして戰場鐵道と化し軍事鐵道機關、鐵道隊、鐵道管理機關一切を挙げての野戰鐵道隊化を促進するに至つた。

右陸送海塚の要求は悉次

四二

(イ) 泰緬連接鐵道クラ鐵道の建設促進

(ロ) 大陸轉塚輸送に伴ふ蘇滿支鐵道一貫輸送力の増強

(ハ) 大東亞縦貫鐵道の建設計畫

等の指導となり敵の空襲に対する指導としては

(ニ) 直接的防空対策の徹底強化

(ホ) 軍事鐵道機關と鐵道隊を一丸とする野戰鐵道隊の編成

(ヘ) 兩方鐵道全關係機關の統一指揮機關の確立

等へと進み更に其の後支那鐵道の軍管理、運輸省鐵道管理部門の戰闘化へと發展した。

三 兩方鐵道

人 泰緬連接鐵道の建設

兩方政略作戰の一段落と共に緬甸確保のため泰及緬甸を連接する鐵道建設の要求が兩方軍よりもたらされた。当時既に馬來より緬

0826

甸に至る海上輸送路は「安全ならざる状態」にあり時日の経過と共に漸次危険の度を加ふべきを予期されたが為であつた。然しながら大本営は其の工事の極めて困難なるべき判断の下に一時反対を表明したのであつたが全設備の進展と其の後の研究とにより之を建設するに決し昭和十七年十月より兩方置をして左記要綱の下に之が建設に着手せしめた。

左記

(1) 建設目的

緬甸に対する後方連絡路の確保と緬甸、泰國の交易交通路の打開

(2) 建設経路

泰鐵道ノンブラドックよりケオノイ河に沿ひ緬甸鐵道タンピサヤに至る約四一五軒

(3) 建設工期

昭和十八年未完成

(4) 輸送能力

日量約三千屯

0827

(5) 軌 間

一 米

四 四

(6) 所要經費 約七〇〇万円

(7) 所要兵力及勞力 鐵道二區隊の外現地勞力を使用す

昭和十七年末大本營は第三部長に若松中將の就任を見ると共に當時緬甸に於ける一般情勢から本鐵道建設工事の促進を企図して前方軍と協議し建設完了後の鐵道能力を三千屯より一千屯に低下し昭和十八年八月末完成を目途に工期の短縮を命令した。

然しながら酷熱未開の密林地帯に加へ近年稀に見る大雨期に遭遇し且コレラ、マラリヤ其の他の惡疫流行猖獗を極め俘虜及現地勞務者に四万人の犠牲者を見るに至り遂に予定した八月末の完成出來ず工期を延長して十月十七日開通を見るに至つた。

以上の様な困難な作業に加へ工期を急がされた關係から開通後の輸送力は容易に挙げず其の後之が整備に亦甚大なる努力を払つたが引續いて加はつた空襲水害等のため最後迄所期の輸送力を發揮

0828

し得なかつた事はかへすがへすも遺憾な事であつた。

然しながら此の鐵道がインパール作戦を始めとして緬甸防衛のため果した役割は誠に偉大なるものがあり太平洋戦争が終した大工事として永く青史に記録さるべきであらう。

2 鐵道の整備と輸送力の維持

軍鐵道隊による泰緬運送鐵道の建設と併行して南方各地の鐵道は専ら鐵道省より派遣された鐵道管理委員の手で復旧整備を進め占領後概ね一年で其の復旧を終り各地鐵道の輸送力は夫々施設、輸轉材料等に若干の未復旧な箇所や減少を見ながらも戦前のそれを凌駕した。然しながら鐵道の復旧も整備も専ら現地資材を利用し殆ど内地より補給を行はなかつた為空襲の激化と相俟つて此の良好なる状態は長くは續かなかつた。

昭和十八年の中頃より南方鐵道は急速に衰微の徵候を現はした。大本営も急速に此の対策を講ずる必要を認めて内地より物動資材

の配当、資材整備の鐵道省への委託一部代替輸送等各種の手段^{四六}を講じたが時既に遅く實際には大なる補給は行はれなかつた。こゝに於て南方鐵道は逐次敵化する空襲と相俟つて自己施設の撤去運用により辛じて其の日[〽]を過すの止むを得ない状態となつて行つた。

3. 鐵道管理機構の変遷

「南方建設」の波に乗つて軍政的色彩を強くした鐵道も逐次米兵の壓迫を受けるに及んで漸く作戦的色彩を濃化した。こゝに於て大本營は鐵道兵力の増強並に南方鐵道全般に亘る作戦的統一運用の必要を認め先づ昭和十九年二月南方軍野戦鐵道隊を編成して鐵道四面部隊を増強すると共に軍事鐵道機關と鐵道隊の統一運用の態勢を確立し次で各地の鐵道部隊と鐵道管理機關（鐵道總局、鐵道管理局等）を打つて二丸とする鐵道隊の編成を行ふ様南方軍の指導を進めて行つた。

此の様な指導を推進する途上にあつて特に問題となつたのは其の
対稱となるへき兩方軍の指導をれ自体ではなくて従来から意見を
異にした陸軍省軍政当局の考へ方を矯正し省部の意見を一致させ
る事にあつた事は正に反肉と云ふべきであらう。

三 蘇滿支鐵道

1. 対北方作戰準備の変遷

前述した様に兩方鐵道の処理が一段落すると共に大本營の鐵道作
戰指導の重点は名實共に對北方作戰準備へと移行した。そして其
主なるものは左の様なものであつた。

(1) 支那兩方等に於て占領撤去した鐵道資材の北方轉用

(2) 奉山線、安奉線の複線化促進

(3) 兩方作戰の経験に基く對北方集中輸送の具体的研究

こうした状態は昭和十八年秋迄続いた。

然しながら兩東太平洋方面戰局の進展に伴ふ國軍作戰指導方針の

變換に依つて昭和十八年十月以降鐵道作戰指導の方針も亦之に即
應して行つた。四八

この指導方針の變換は永年対北方準備を目標に大陸に力を注いだ
大本營の鐵道作戰指導の方針をして正に百八十度の大變換を強いた
たもので其の後対北方鐵道作戰準備は完全に停止し反対に南方鐵
道の整備、内地防衛及支那作戰への即應、大陸轉嫁輸送の促進、
之に伴ふ大陸鐵道一貫輸送の増強等と云ふ形をとつて対米英戰即
應の指導が進められた。

2 大東亞縦貫鐵道建設計畫と平漢及湘桂作戰

昭和十八年頃から大本營は太平洋に於ける米軍の攻勢に呼應する
重慶の總反攻を近く予期して左の様を目的の下に北中支及中南支
打通作戰の研究準備に入つた。

左記

(1) B 二九の基地奪取

0832

(2) 桂柳地區よりする重慶の總反攻破擯

(3) 兩方との陸上交通路の打開

(4) 右の結果として重慶戦力の衰滅

之より先昭和十八年春頃より大本營鐵道課は逐次大東亞縱貫鐵道建設の研究に着手し秋頃に至つて漸く其の成案を得時を同じくして企図された右支那作戰の研究に即応して一挙之を建設すべき具體的研究準備へ入つた。

この鐵道は東京を起点として京城、奉天、北京、漢口、河内、ベトナムを経て昭南に至るもので關釜間を連絡船に依る事は別として其の他の多くは既設線を利用し得て新線建設區間は僅かに兩支に於ける柳州、南寧間及佛印泰鐵道の未連接區間で夫々二五〇斤に及ばず建設は「技術的には極めて容易で彼の泰緬甸連接鐵道などの比ではない」と云ふ判決であつた。

然し當時国力の現状は既に其の建設資材を捻出する余力無く戦局

の推移も亦之が建設及維持の兵力的負担に堪へざるに至るへしと
云ふ様を理由と共に作戦目的も亦^{B-29}の対日空襲基地覆滅のみに限
定されたのと相俟つて遂に此の建設を断念し鐵道作戦としては單
に此の作戦に即応する程度に止むるの止むを得ない事となつた。
之が為資材的には滿洲より軌道材料五十千分を專用したに止まり
其の他は挙げて支那派遣軍の減量に委せられ唯鐵道兵力のみ所要
のものが増加された。充當された鐵道兵力は左記の様に龐大なも
ので其の大部は新に編成するを要し大本營としては此の編成に特
に大なる苦心を払つた。

左記

野戦鐵道司令部

鐵道聯隊

獨立鐵道隊

鐵道材料廠

五〇

0834

此の作戦は昭和十九年四月より開始され比較的順調に進んだ。鐵道の占領復旧も南平漢線、洛鄭線の打通を同年八月完了し引續いて開鄭線、洛鄭線の建設復旧を行ひ粵漢線、湘桂線方面も亦一時桂林迄占領復旧を見るに至つた。

3. 大陸轉輸と日鮮滿支陸上連絡路の増強

船舶の消耗は戦局の不利と正比例して増大し遂に從來から滿洲、支那より直接船舶を以て輸送した大陸物資の対日輸送も逐次鐵道に依存するの止むを得ない情勢となつた。そして其の要求は昭和十九年に入つてから急速に増大し昭和十九年度に於ては五〇〇万屯乃至六〇〇万屯の輸送が要請された。

こゝに至つて対蘇作戦のため水年準備された大陸鐵道は正に其道集中の形を取り対日輸送のため動員されるに至つた。同時に朝鮮鐵道（京義線）の復舊を促進する事が急務となり大本營としては之に滿洲の対蘇作戦準備資材を流用し或は大石橋以南の運京線

を撤去充當させる等大いに之を促進に努め昭和二十年二月に至つて漸く完成を見た。

五二

此の輸送は現地の官行機關としては専ら關東軍が中心となつて行はれ後には軍事鐵道機關に於て之を管掌する迄驗化されて行つた。

四 内地鐵道

傳統的に大陸鐵道重点の指導方針を堅持した大本營は太平洋戰爭が開始された後に於ても内地鐵道に對しては之を鐵道の總兵站と考へる以外大なる顧慮を払はなかつたが戰局の進むにつれて南方及支那大陸に於ける空襲の經驗や太平洋戰局の見透しから漸次鐵道防空の必要を痛感するに至り加之國軍作戰指導の方向逐次本土決戦へと移行するに及んで漸く昭和十九年始め頃より鐵道作戰指導の重点を内地鐵道へと轉換するやうになつた。

即ち昭和十八年以來緬甸及支那鐵道に對する空襲の經驗を以て逐次運輸省鐵道總局の防空指導を進めた大本營は昭和十九年夏米軍のサ

0836

イバン上陸を機として本土空襲に本土決戦必至と判断し内地鐵道の急速なる作戰鐵道化を期して第三部長より鐵道總局に対して左の様な要領を掲げて申入を行ふなど逐次其の指導を強化して行つたが其の實現は容易でなく昭和二十年に至つて漸く其の緒についた。

左記

- (1) 鐵道防空の徹底的強化
- (2) 鐵道従事員の服務規律の確立
- (3) 内地鐵道の作戰的再編成

此の間鐵道部隊に關しては昭和十九年七月從來主として軍事輸送の處理を担当して居た第一鐵道輸送司令部を復歸し新に内地に於ける軍事鐵道業務を統理すへき内地鐵道司令部を新設九月には教導鐵道團次いで獨立鐵道大隊八箇を編成之を統合して内地鐵道隊を編成逐次其の實力を充實して行つた。

三 鐵道防空

本期に於ける鐵道作戰指導に根本的變換を齎したものの一つは實に鐵道に対する空襲の激化であつた。

昭和十七年の雨期明けより印度方面よりする英米空軍の緬甸に対する空襲は漸次激しくなつた。就中交通線に對する空襲は特に甚しく昭和十七年末より昭和十八年四、五月の頃一雨期前迄に緬甸鐵道の輸送力は概ね三分の一に減少する實情となり鐵道防空に對して大なる教訓を與へた。

此處に於て大本營は昭和十八年夏其の鐵道幕僚を長として内地、滿洲、朝鮮、華北各鐵道の技術者を配した視察團を緬甸に派遣しこの報告に基き先づ大體鐵道輸送協議會を東京に開き鐵道防空要領の一案を作製急契大體鐵道の防空を強化する様指導を進め同時に内地鐵道に對しても之によつて鐵道防空対策の促進を要望逐次之を強化して行つた。

緬甸鐵道に對する防空対策は右に述べた如く真に急務であつたにも

河内ならず当時鐵道聯隊は泰緬甸と接鐵道の建設に吸収されて余裕なく僅かに第五特設鐵道隊約二五〇〇名によつて緬甸全域の鐵道確保に當つて居る存様であつた。そこで大本営は取敢へず第五特設鐵道隊を強化するに決し鐵道省より川田鐵道監を長とする約一七〇〇名の鐵道管理隊を編成して緬甸に派遣した。次いで泰緬連接鐵道の開通に伴ひ第二鐵道監部及鐵道第五聯隊を轉用更に新に内地に於て編成した鐵道第七聯隊を緬甸に投入して鐵道の確保に當らせた。この結果敵の空襲愈々激烈を加ふるに拘はらず鐵道防空の成果劃期的に上り緬甸方面軍の作戦の要求をも充足し得て緬甸鐵道隊の防空必勝の信念を確立させた。

此の様にして大本営は緬甸鐵道に対して兵力増強の処置を講じ現地に於ける鐵道部隊も亦よく奮闘して其の實力を國軍一般に認識させたが資材の補給に當つては殆ど困難する事が出来なかつた。之が為兩方鐵道は其の防空対策用資材を兩方鐵道自体に於て相互融通し要

度の少ない線路を撤去專用するの外無い状況となり終に「鐵道を防
 空的乃至作戰的に再編成にする所迄に之を強行して行つた。

こうした「鐵道再編成」の考へ方は内地鐵道等へも齎らされたが直
 接國民生活、生産拡充と結びついて居る内地の鐵道にあつては軍の
 強力を要望にも拘はらず容易に所行するの域に至らず漸く本土決戦
 必至となつた昭和二十年に至つて極一部の鐵道がこの対象となつた
 に過ぎなかつた。

六 鐵道部隊の増強と之が運用方式の交換

ノ 鐵道部隊の増強

開戦前前章に於て述べた様な趨勢にあつた軍事鐵道機關及鐵道隊
 は太平洋戦争の進展に随つて一般兵團は逐次増強されたのにも拘
 はらず殆ど変化無く僅かに昭和十八年末迄に於て野戦鐵道司令部
 一、鐵道輸送司令部三が増強された外特に鐵道隊の増強は昭和十
 九年に入る迄實現を見なかつた。

鐵道隊が増強されなかつた理由は左記の通りであるが特に器材の不足が決定的であつた。

左記

(1) 大東亞全域に亘り建設期に入り國軍全般として現實的に鐵道隊の必要を痛感させなかつた

(2) 人的資材的準備特に部隊裝備用器材の準備が殆どなく編成余力が無かつた。

同時に見逃し得ない事は大本營鐵道作戰指導の方向があまりにも大陸に固定し現實の作戰を相避離して居た一事であつた。此の爲鐵道作戰指導の方針を再換して一般作戰に即応するの態勢を採り且又緬甸鐵道隊の戦績から鐵道作戰に対する國軍一般の認識が深まり鐵道確保のため鐵道兵力の必要性を痛感させるに至つて逐次鐵道隊の増強を見るやうになつた。此の際に於て右第二の理由は之が打開に極めて困難であつたが大

本管は真に止むを得ざる考へ方として

イ 装備は鐵道の確保若くは特殊任務に應ずる最少限として極度に之を低下す

ロ 人員は現鐵道従事員中の他兵種又は現に他兵種に召集服務中の鐵道従事員を召集又は専屬流用す

ハ 右に依る装備の低下訓練の不足は編成人員の増加、特務編制の採用によつて之を補ふ

と云ふ方策の下に之を解決して昭和十九年二月

- 南方鐵道防衛用として 鐵道聯隊 二
- 佛印乘鐵道逃理用として 鐵道聯隊 二
- 支那作戰用として 鐵道聯隊 四

- 特種鐵道大隊 七
- 鐵道材料廠 一

を編成したのを始め逐次増強されたが従來其の優秀を誇つた鐵道

部隊の裝備も逐次低下して遂に無裝備となり一隊隊約二五〇〇名の定員は三五〇〇名となり万能大隊又は中隊によつて充たされた。部隊の編制も特務大隊又は中隊の編制を採るやうになつた。加之、部隊長級要員の不足は從來認て部隊編制によつた鉄道部隊をして獨立せる鐵道大隊の編成を行ふやうになつた。

そして最後の時期には未教育兵による鐵道作業隊の編成を行はざるを得なかつたがこれこそ編成委員器材共に全く底をつき且本土決戦準備に一日の余裕をも見出し得なかつた当時の情勢に於て且教へ且戦はんとした全く窮余の一策であつた。

ふ鐵道部隊運用方式の變換と總軍野戰鐵道隊

太平洋戦争当初軍事鐵道機關及鐵道隊は夫々獨立して總軍若は方面軍の傘下にあり各々別箇に運用されて居た事は前章に於て述べた所であるが敵の空襲激化と國軍の作戦が攻勢作戦より防衛作戦へと移行するに伴ふて軍事鐵道業務の重點を「軍事鐵道機關」

つては輸送、鐵道隊は鐵道の占領復旧へと去ふ夫々別箇の考へ方から兩者共に「鐵道乃至鐵道輸送の確保」へと轉換させ其の上鐵道の戰場を前線後方の別無く大東亞全域の鐵道に拡大し且其の鐵道確保のため鐵道隊の實力を認識させるやうになり漸次右兩者を統一して運用する必要を痛感するやうになつた。

かくして大本營は昭和十九年二月鐵道部隊の劃期的増強を期し右統一運用方式を採用するに決して關東軍、北支那方面軍、第六方面軍、兩方軍に夫々軍事鐵道機關及鐵道隊を統合した野戰鐵道隊を編成其の野戰鐵道司令官をして統一指揮させるやうになつた。当初編成された野戰鐵道隊の編成は概ね次の通りである。

左記

1 關東軍野戰鐵道隊

司令官 關東軍野戰鐵道司令官

關東軍野戰鐵道司令部

關東軍第三鐵道隊

第三鐵道監部

鐵道第三、第四聯隊

第三鐵道材料廠

鐵道第二聯隊

第二鐵道材料廠

停車場司令部 若干

2 支那派遣軍第一野戰鐵道隊（北支那方面軍轄下）

司令官 第二野戰鐵道司令部

第二野戰鐵道司令部

第二鐵道輸送司令部

鐵道第六、第十三聯隊

停車場司令部 若干

3 支那派遣軍第二野戰鐵道隊（第六方面軍轄下）

司令官

第四野戰鐵道司令官

第四野戰鐵道司令部

鐵道第一、第三、第十一、第十四、第十五聯隊

(鐵道第三聯隊は滿洲より轉用)

第一、第二獨立鐵道工務大隊

第一、第二獨立鐵道橋梁大隊

第一乃至第三獨立鐵道工作隊

第四鐵道材料廠

停車場司令部 若干

4 南方軍野戰鐵道隊

司令官

南方軍野戰鐵道司令官

南方軍野戰鐵道司令部

第六鐵道輸送司令部

第二鐵道監部

鐵道第五及第七乃至第十一聯隊

第四、第五特設鐵道隊

第一鐵道材料廠

停車場司令部 若干

0846